

## 「子どもと心中を考えて」～急な環境変化と育児ノイローゼ～

■仮名:Aさん  
■年齢:38才

## 【夫の転勤】

相談者は関東在住のAさん、38才。家族は42才の夫と、生後7か月になる子どもがいる。Aさんの夫が、転勤辞令を受けたのは3ヶ月前のことだった。一家は住み慣れた関西から関東のマンションへと引越した。幼い子を抱えたまま不眠不休の引っ越し作業が数日間にわたり、荷造りは全てAさん一人でやらなければならなかった。東京に着いて3日後、社宅の部屋は段ボールの山で何も片付いていない。荷物の隙間に布団を敷いて仮眠する日々が続いた。夫は新しい職場のことで頭がいっぱいなのか、家庭のことはまるで無関心だった。朝早く出掛け、帰宅は決まって深夜になる。子どもも慣れない環境でストレスを感じているのか、夜泣きがひどかった。連日の夜泣きからAさんは徐々に不眠症になっていった。夜泣きする度にAさんが起きてあやしったりミルクをあげたりする。子どもの夜泣きに対応するのは決まってAさんの役目で、夫はずっと寝たふりを貫いていた。

## 【育児ノイローゼ】

そのうちAさんは「子どもの夜泣きが、近所の人に迷惑をかけているんじゃないか…」と考えはじめた。夫はほとんど家に居ない。常に家にいるAさんは、引越してから隣近所に挨拶回りをしていなかったことで引け目を感じ、日中に子どもを連れて公園を散歩することもできずにいた。そんな日々を繰り返すうち、次第にAさんはノイローゼ気味になっていった。夫は相変わらず深夜に帰宅し、荒れ果てた部屋を見渡してため息をつくだけで、話し合いを持つともせず仕事に逃げていた。Aさんは徐々に両親や友人との連絡も避けるようになっていった。昼間、夫が仕事に行ったあともカーテンを閉め切り、今までは何でもなかったことで悲しくなったり、塞ぎ込むようになっていった。

## 【自殺未遂と今後の展望】

ある日一。Aさんは近所の踏切の中で子どもを抱えたまま立ちすくみ、電車が来ることにも気づかなかった。幸い、近くにいた男性に助けられ、子どもと共に一命を取り留めた。この一件でAさんはふと我に返る。「何てことをしてしまったんだろう…」一。それまで抑え込んでいた感情が一気に溢れた。自宅に戻り、たまたまつけていたテレビで「新宿駆け込み寺」が映っていた。Aさんはすぐに駆け込み寺に電話をかけ、その数日後、夫と共に来所した。

そこで、こちらから夫にAさんの状況を説明した。「奥さんは引越しによる環境の変化、育児ノイローゼ、社宅で暮らす気苦労。三重苦になってがんじがらめになってる。このままだと誰も救われへん」「そうですか…」と、夫は事の重大さを感じていないようだった。ご近所への挨拶回りも妻であるAさんがやってくれると思い込み、任せっぱなしだった。Aさんが重いつ状態になり、娘を道連れに自殺未遂まではかっていたとは知る由もなかったという。夫の態度に疑問を抱き、「奥さんは、ご主人が転勤してきてから今まで全部一人でやらなあかんかったんや。慣れない環境で子育てにも追われてな。仕事が忙しいのは分かる。けどご主人、あんたにも同じく責任があるんやから。仕事に逃げたらアカン。今からでも遅くない。まずは、『遅ればせながら…』と言って、社宅の人にお菓子でも持って挨拶まわりしたらええ。そのときに、『妻は関西出身でこちらのことは何もわかりません。子どもも小さいので、ご迷惑おかけすることがあるかもしれませんが、いろいろとご指導ください』とか言うてな」。夫にはそう助言した一。

それから少し経った頃、Aさんから電話があった。「おかげさまで、主人も家事や育児に協力してくれるようになりました。そして、社宅の人たち主催のイベントに誘ってくれて、家族で交流ができるようになりました。本当にありがとうございました」という嬉しい報告だった。出産や昇進というおめでたい出来事であっても、環境変化がいくつも重なり大きなストレスとなることもある。意外と身近なネットワークに助けられることもあるため、思い切ってあらゆる機会や機関を頼ることも一つの方法だ。